

企画
部会

〜ご命日に聞く〜

悲しみからみえたもの

ご命日の思いを聞かせていただくと決まった時、私が頭に浮かんだのは、平成21年8月4日に亡くなった父(59歳)のことでした。亡くなった時は、周りのことなど考えられず、父のいない私の人生など考えられないと思っていました。それから年月が経った今、今まで聞いたことのなかった母の思いを聞きたいと思いました。

新保 ご主人はどのようなお人柄でしたか。

母 家族の為に働き、まっすぐに生き、私にも子どもたちにも言葉は少なく背中では父親の生き様を教えてくれた人でしたね。家族おもいで仕事熱心、男とは：昭和の生き残りの父であり男でした。

新保 ご主人がお亡くなりになられた時の状況、その時起こった感情や思いをお聞かせ下さい。

母 肺がんで最後は静かに息を

ひきとりました。その時の思いは、涙も出ず自分の心はどこに行ってしまったのかと。記憶に残らないほど次から次へとすべきことに追われ、どうして良いか分からなかったです。何も出来ない自分がいて後悔ばかり。今もその思いでいっぱいです。「何も出来ない」「出来ていない」と思われているんだらうな」と自分を追い詰めて難しい時期でした。人に迷惑をかけたかどうかという緊張感で自分が死にそうになりました。

新保 ご主人を亡くされてしばらくの間、どのような気持ちで過ごされましたか。

母 悲しい、辛いという気持ちが一番先に来るのではなく、残された問題(会社・銀行・法的手続き・相続など)が多すぎて大変でした。四十九日まではあつという間で、納骨してから淋しさで一人になると

涙が出てくるんですね。

新保 ご主人を亡くされて改めて気づいたこと・教えられたことがありましたらお聞かせ下さい。

母 私は働いて30年位経ちますが、夫がいるという事で社会から信用と守りをもらっていたことに気づきました。自分一人になると職場も家庭も激変。見える景色は少し変わってききましたよ。教えられたことは、健康、働き方や余暇のつくり方。無理をしない事、シンプルに生きる。自分らしく生きていれば幸せでいれるかな。泣いて生きていくのも一生、どうせなら笑って楽しく生きていこうと。母は元氣じゃなきゃね。

新保 どんな時にご主人を思い出しますか。

母 悩み事の時、お父さんならどんな言葉をくれるかな。子ども・孫たちの成長と一緒に

見てほしかったな。ご夫婦で旅行している人たちを見かけた時、一緒に歩いて楽しめたかったな。と同時に、夫の様な男の人には私が生きている限り出会うことはないと思っています。

新保 あなたにとって「ご命日」とはどのような日ですか。

母 夫が亡くなって9年。月命日は、私と亡き夫が向き合う時間。祥月命日は、子どもたち、孫、友人が集まり、皆元氣であることを報告。美味しい食事をしながら思い出話に花が咲く時間です。

新保 お寺とお付き合いされて、今どうですか。

母 私がお世話になっているお寺(他宗寺院)はほとんど大きくなり、少しずつ遠くなつていく様な感じです。節目にはお金がかかりますしね。私もお寺に積極的に足を運ばないことを反省しています。考えるところはたくさんあります。

新保 あなたにとってお寺さんとはどのような存在ですか。

母 毎月のお参りも使用人のお坊さんが来るので、住職に会うことが少なくなりました。年忌のお願いをするだけです。

新保 お寺に求めるものはありますか。

母 何か求めていないかな…流れのままに。問いかけたい時には電話をかけづらく、ネットですべて調べて解決してしまいま

す。

近年のお寺とご門徒の関係は、亡き人がご縁となって始まること

が多いように感じます。生前からのお付き合いがあるのが理想ではありますが、葬式仏教となつていく関係のなかで、ご門徒との関わりが深いものになるのか、浅いものになるのかはお寺に身を置く者たち次第のような気がします。ご門徒一人一人に亡き人のお話しを聞かせていただき、残された人たちの悲しみや不安、怒りに寄り添っているのかと私自身が問われると、答えに困るところがあります。

母は話の最後にこう言いました。「お寺へ気軽に行ける様になることを願います」私はこの言葉をとっても重く受け止めました。今、法縁の過疎が問題とされています。様々な要因があると考えられています。僧侶と社会との温度差が大きく関係しているように思えます。お寺の門戸を開くだけでは何も変わらない。僧侶をはじめ、お寺に身を置く者たちがご門徒、地域、社会と交わることが大切ないように思えます。さらに、弱い自

分や何も知らない自分をさらけ出すことで交われるという事もあるのかもしれない。「お寺さんは雲の上の存在」「坊さんなんて」「仏教なんて」とレットルを貼られてしまわぬよう、アンテナを張り胡坐をかかずに浄土真宗の教えを聞かせていただきたいと思つていま

す。

私は父を亡くした時、人が亡くなるのがこんなにも悲しいことなのかと初めて知りました。また、生と死を別ものと考えていた私に、生老病死のお話しをしてくださったのは浄土真宗のお寺さんでした。そしていつの日か真宗の教えが様々な人にとって身近となり「お寺に行くことが生きがい」そんな言葉が聞こえてくることを願います。

真宗の教えを一方向的に聞かせるのではなく、あなたも私も共に聞かせていただく。それがこの先、仏縁を通して人(お寺)と人(ご門徒・地域・社会)とがつながっていくことではないでしょうか。

(文責 新保友絵)

札幌大谷高校野球部が明治神宮野球大会で優勝 女子バレーボール部は「春高バレー」全国大会出場決定

札幌大谷高校野球部は11月9日より東京の明治神宮球場で行われた第49回明治神宮野球大会で、初出場、初優勝を達成しました。前号でお伝えした通り同校野球部は10月に行われた第71回秋季北海道高等学校野球大会で初優勝し、まず、明治神宮野球大会の出場権



を得、同大会で見事、初優勝に輝きました。大会では1回戦で京都の龍谷大平安高校に6―5で競り勝ち、2回戦で東京の国士館高校、準決勝で福岡の筑陽学園を連破し、決勝で金沢の星稜高校に2―1と逆転勝ちし、初優勝を果たしました。同大会での優勝は北海道では2校目、甲子園出場経験のない高校では初めてだそうです。

また、女子バレーボール部は平成30年度第71回全日本バレーボール高等学校選手権大会(いわゆる「春高バレー」)で準優勝に輝き、来年1月に行われる全国大会出場を決めました。

